

## 八 久遠の慧日

「……死して満足、生きて満足。何とした有難い身の上にさせて頂きました事よ。ただただあゝ間にあうてよかった。なあなあ、乗りおくれなば誰か渡さん。弘誓の船にまかせつつも、座右の先生の御写真を拝しては、まだまだ生きて生きぬいて先生の御教化をのがしてたまるものかと、船中で金槌が力んでいる事、お笑い下さいませ。」

これはこれ、通称ケゴヤ、倉本数人氏の御手紙である。昨年暮迄、善知識を求めて説教を聞き廻ること三十年、遂に聞きえず。本年一月御正忌の会座に乗り込んで、第一日の座談に出られ、真創勝負の一騎打ち、三十年と三千年のとり組、「あなたが坐っているところには、四重の綾錦の広大なる座ぶとんが敷いてある。しかるにあなたはその上に土足のままで上っている。その土足をぬいで貰いましょう。」と攻めよつてもこの古狸びくともしない。しない筈じゃ。心の中では、「先生そんな生やさしい御教化では駄目です。半殺しにされてもいい、もつともつと手きびしい御意見をして下さい。」と思うておられたのだから。もし肉体への同情があつて手ごころされてはと、肺患をやつた体であることもかくして言わない。しかしまんまと効を奏し、その夜は何と答へようかと一睡も出来なかつたとの事。

第二日に座に出ていわく「どう考えても頭が下りません。頭の下らぬままを救うて貰います。」とやらかした。「古狸その手を食うか。」向うが古狸なら、こちらも古狸。そりや三十年かかつておぼえた話じゃが。ことは大変、あわれケゴヤはその夜もついに一睡もせず第三日が来た。

「先生、私は頭の下らぬ奴、どうにもならぬ奴……」といいつゝケゴヤは大地に全我を投出して合掌念仏。「そこじゃそこじゃ。ありがたいのう。わかつたか。久遠劫来の病気の根が見えたか。」まるまるただの御味いがわかつたか。頭が下つたらこそ下げたためしのない我のすがたが見えたのだ。どうにもならぬまんまが、大悲本願の一方働き、手をついたところが光明の中、古狸ならこそ本願の確かさ。ハイの返事も間に合わぬ、南無阿弥陀仏の中にまるめとられた古狸。ケゴヤは遂に参つた。南無阿弥陀仏でこと足り、こと足りて余っている。

見えたか、わかつたか、心の底、如何に猫なで声で説教が上手に出来ようと、万巻の書を読んでいようと、その底に、奥底に大きな魔王が天下太平、二階三階の説教を添乳そえちちに安々と眠つてはいないか。自己欺瞞の酔いがさめぬ間、まだまだ二世や三世は、大平楽と悪魔は主の座に眠る。時々おきては、絶対必然の智慧の大道に追い込まれぬような工作をしておいては、やれ安心と自力の魔王は微笑する。魔王が笑えば我は泣かされる。

甲に「頭を下げよ」とたたかれると、氣に入らぬ魔王は、乙の説教師に「下らぬ奴をこのまんま」と甘やかされて小康を得る、一時のがれの仁丹安心、それも年を重ねると、信を獲たのはわしばかり、依然として人を見下げて善悪の裁き、自分の頭が高ければ高いほど、頭の低いが人格に見える。ある島では甲乙丙丁敬語など滅多につか

わない。人と人との挨拶でもかんだんなもの、「今日は」と頭が一寸動くだけのこと、ところがその人たちは、頭の低い人を見るとすぐ人格者だというそうだ。我の自己満足からだ。しかし確かに頭の低いのは人格に違いない。

しかし気をつけぬと、性格と人格とが取違えられる。羊のような性格を人格と見る、それはいいことではない。真人格は念仏である。法主の法衣をとらえて、「あにき覚悟はよいか」と言ったり、寺の世話方が集った所で逆立ちをして見せ、「お前たちが地獄へ落ちてゆく真似じゃ真似じゃ」という庄松は御無礼者である。しかしこの一介の野人が、法然上人の御再来と崇仰せられた。素朴簡明に大悲無底の領解が現われているからである。

腹の底にかくれていて全我を支配している自力の魔王がなかなか正体を出さない。魂の中に食い入って出て来ない。と言つても別に正体があるわけではない。ただ全我を闇に向つて動かしているだけだ。汝を空っぽにしているだけだ。

ケゴヤの第二日の答がなぜいけないか。「どう考えても頭が下りません。下らんまんまを救うて貰います。」これは誠に結構な答だが、しかしそれはまだ頭の下らぬ、どうにもならぬ必墮無間の自力無効が知れたのでなくて、三十年かかつて覚えて知った言葉だけなのである。それが禍して、熱心に求めながら三十年もわからなかつたのである。たとえ千言万語の法もそれが自力の手に握られたのでは、信にはならない。頭の下らぬどうにもならぬ我を底のない大慈悲に救はれたのと、「頭の下らぬものをそのままお救い」とおぼえたのは、根本的に違っている。幾年幾十年の仏学の研究も、それだけでは決して信心獲得ではない。

心の底の大きな石をそのままにして、如何に論理の糸が巧妙にくりひろげられても、それは結局自我の遊戯にすぎない。捨てた捨てた皆んな捨てた・・・捨てさせられた捨てさせられた。みんな捨てさせられたそのまんまの上に、南無阿弥陀仏は名告り出て下さるのである。すべて捨てたとは何も捨てず、もとのままのことである。

一人のインテリ青年いわく、「私は何も信ぜられなくなりました。人生はもちろん、私自身さえ信じられなくなりました。」と。これは又何という自覚？であろう。しかし君が言っていることは嘘だ。そう言っている君の心の底には、そういう風に言う自己を肯定しているではないか。それが自己肯定の相であることは、かくいう君に苦悶も熱い求め心もないことわかる。まさか今頃流行のニヒリズムやダザイズム（太宰イズムか）ををたらっているのでもあるまい。「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらごとたはごと真実あることなきに、念仏のみぞまことにしておはします。」念仏のまこと、南無阿弥陀仏のまこと、この常住真実清浄なるものまことなくして、どうして内も外も嘘でかためたところの「みなもてそらごとたは

「ごと真実あることなき」煩惱具足の我が見えようぞ。本願の真実に打当たつてのみ、うたがいなきそらごとたはごとの我のまんまが救われて念仏申すのである。

お浄土すとぬけの御念仏、本願そのままの御念仏、如来廻向の御念仏、無根の信の御念仏、何にも無いままの御念仏、非行非善の御念仏、数の多少によらぬ念仏、声の大小によらぬ念仏、理窟の入らぬ念仏、賢い人には用事のない念仏、悪人愚者にのみありがたい念仏、念仏が念仏で喜ぶ念仏、てばなしの念仏、これはこれ如来の正覚華、高原の陸地ろくちには咲かず卑湿の淤泥おでいの中に咲く淤泥華、弥陀の身代限りがそのまま私の身代限りの御念仏。唯念仏申すこと、唯念仏申すこと。

無限絶対の真実にまるめとられて後に、全我念仏になつて後、その身を教壇に田園に役所に運べ。政党をおこした中興さんが、検束されて立身出世以前の地獄におち、今の今、独房入りの諸注意を与えた戒護課長典獄補が次の番には自ら召喚、取り調べ、身柄収容で独房入り。さてさてあわただしい人生流転の相ではある。

「あの人が頓死したかや南無阿弥陀仏、鬼にまけぬときのふ云うたに。」罪の前にはへまはやらぬというた法学博士も何にもならぬ。帝銀犯人が如何に立派な絵を書いても美しい字を書いても何にもならぬ。根本本罪そのままでは仏教学の博士も何にもならぬ。世間にのさばり出る前に何故学問より前のもの、芸術より前のもの、政治より前のもの、道徳より前のものの解決をしておかないか。

一度弥陀をたのめば、おきてもねてもどうしてもこうしても、大悲金剛の大地の上だ。一蓮院師云く（秀存法語一七六則）「或人云く、どうも私は吾身のわるきいたづらがおもひつまりませぬ。答えて云く、いたづらものがいたづらものとおもひつまらぬなれば、夫でいよいよおもひつまるなり。いたづらものでありながらそれがいたづらものと思いつめられぬようにいたづらものとおもひつむべし。地二因リテ倒ルル者ハ地二因リテ立ツト。」機の細工絶対無用、如何に自己が知れようが掘り下げようが、味がよからうが、自力がすたらねば何でもないこと、一度大悲の中に全我を投げ出して念仏すれば、念仏一つでこと足りる、いわゆる美女の百態は悉く美、醜婦の百態は悉く醜。太陽がなければ人も社会も国家もない。久遠の慧日なくばただ鬭争と流転あるのみ。